

第40回

日本コミュニケーション障害学会 学術講演会

予稿集

The 40th meeting of Japanese Association of Communication Disorders

会 期：2014年5月10日(土)・11日(日)

会 場：金沢大学 宝町キャンパス

会 長：大井 学

金沢大学 子どものこころの発達研究センター
大阪大学大学院 連合小児発達学研究所金沢校

主 催：日本コミュニケーション障害学会

後 援：石川県言語聴覚士協会

石川県教育委員会
金沢市教育委員会

失語症者における平叙文・疑問文イントネーション認知に関する研究 —アクセント型による比較—

土屋 かおり¹⁾、吉畑 博代²⁾、進藤 美津子²⁾、
荒井 隆行³⁾、都田 青子⁴⁾

- 1) 上智大学大学院 言語聴覚研究コース
- 2) 上智大学 言語聴覚研究センター
- 3) 上智大学 理工学部 情報理工学科
- 4) 津田塾大学 学芸学部 英文学科

【はじめに】失語症者の平叙文・疑問文イントネーション認知能力は低下しているという報告があるが(金山、1999)、アクセントが失語症者のイントネーション認知に及ぼす影響を検討した研究はみられない。そこで本研究は、アクセント型の違いが失語症者の平叙文・疑問文イントネーション認知に与える影響を調べた。

【方法】研究協力者は、失語症者27名(63.7±8.6歳)と健常者18名(58±4.9歳)であった。語音が同じであるがアクセント型が異なる2モーラ同音異義語20ペアを抽出した。これらの語を東京方言話者1名に平叙文および疑問文で発話してもらい、録音した音声を刺激とした。具体的にはHL平叙文(例「雨。」)20問、HL疑問文(例「雨?」)20問、LH平叙文(例「鈴。」)20問、LH疑問文(例「鈴?」)20問の計80問(4条件)を研究協力者にランダムに呈示し、平叙文か疑問文かを同定してもらった。

【結果】4条件全てにおいて、失語群は健常群よりも有意に低下していた。失語群内において損傷部位、聴理解重症度、失語タイプによる差は認められなかった。失語群でHL平叙文得点とLH平叙文得点を比較すると、LH平叙文の方が有意に正答率が高く、HL疑問文得点とLH疑問文得点では、HL疑問文の方が有意に正答率が高かった。

【考察】失語症者の平叙文・疑問文イントネーションの認知能力は、健常者と比較し低下している可能性が示唆された。東京方言の日本語において、HL平叙文はHLアクセントのピッチ下降と、平叙文による文末下降イントネーションが重なって現れる。またLH疑問文はLHアクセントのピッチ上昇と、疑問による文末上昇イントネーションが重なる。このように平叙文・疑問文イントネーションが語アクセントと重なって分離できない場合、失語症者のイントネーション認知はより困難になる可能性が示された。

重度失語症者の視覚シンボルの理解 —JIS絵記号を用いて—

山上 裕子¹⁾、吉畑 博代²⁾、進藤 美津子²⁾、
山澤 秀子³⁾

- 1) 上智大学大学院 言語聴覚研究コース
- 2) 上智大学 言語聴覚研究センター
- 3) 西東京市保谷障害者福祉センター

【はじめに】AAC領域において重度失語症者に視覚シンボルが用いられることがある。本研究では重度失語症者を対象に、日本版PICを基に2005年に開発されたJIS絵記号が理解可能かどうかを検討した。

【対象】ボストン失語症診断検査(BDAE: Goodglass and Kaplan, 1972)の失語症重症度尺度で0から2レベルの重度失語症者(以下、重度失語群)22名。平均年齢63.6歳で男性15名・女性7名、全員右利きでうち20名は非利き手を使用。比較対照群(以下、健常群)はコミュニケーション障害既往のない平均年齢60.9歳の男性5名・女性16名、計21名。

【方法】課題はノートPCと接続したタッチパネルディスプレイに表示した。絵カード1枚とJIS絵記号を4枚を呈示し、絵カードに対応するJIS絵記号をタッチしてもらった。選択肢は(1)正答(2)正答と形態的に類似するもの(3)正答と同一の下位カテゴリー内にあるもの(4)形態的に類似せず、同一の下位カテゴリー内にはないもの、で構成した。課題数は20で、反応時間の制限は設けなかった。

【結果】課題正答率は重度失語群92.5%、健常群98%であった。課題反応時間の平均は重度失語群185.5秒(S.D.=117.74)、健常群65.0秒(S.D.=28.72)で、重度失語群は健常群と比べて有意に長かった。反応時間に応じた重み付け得点は、重度失語群35.7(S.D.=6.53)、健常群52.6(S.D.=6.63)で、重度失語群は健常群と比べて有意に低かった。

【考察】重度失語群の正答率は高く、JIS絵記号の理解は十分に可能であった。一方で課題遂行には健常群の3倍近い時間を要し、反応時間に応じた重み付け得点は健常群と比べて有意に低かった。今後JIS絵記号をAACとして適用する場合には、実際のコミュニケーション場面における実用性の問題を検討する必要がある。

第40回日本コミュニケーション障害学会学術講演会 準備委員

大会長 大井 学 (金沢大学子どものこころの発達研究センター
大阪大学大学院 連合小児発達学研究所金沢校)

事務局長 田中 早苗 (NPO 法人アスベの会石川)

準備委員 小林 宏明 (金沢大学人間社会研究域学校教育系)

武居 渡 (金沢大学人間社会研究域学校教育系)

三浦 優生 (金沢大学子どものこころの発達研究センター)

吉村 優子 (金沢大学子どものこころの発達研究センター)

大兼政由梨 (小松市民病院リハビリテーション科)

谷内 初美 (国立病院機構医王病院リハビリテーション科)

第40回 日本コミュニケーション障害学会学術講演会 予稿集

2014年4月11日発行

発行者：第40回日本コミュニケーション障害学会学術講演会会長
大井 学

事務局：〒920-1192 石川県金沢市角間町
金沢大学 角間キャンパス 人間社会研究域 学校教育系
FAX：076-264-5515
E-mail：taikai40@ed.kanazawa-u.ac.jp

出版：  学術協会専門出版社
株式会社 セカンド

〒862-0950 熊本市中央区水前寺4-39-11 ヤマウチビル1F
TEL：096-382-7793 FAX：096-386-2025